

## 三井三池炭鉱～福岡県大牟田市・熊本県荒尾市

藩政時代に端を発する「ヤマ」の歴史は、わが国の近代化の歴史そのものだった。1997年の閉山から9年余りが経過したが、福岡県大牟田市や熊本県荒尾市には今も坑口や人員昇降用の櫓（やぐら）、巻き上げ機室などの遺構が残り、往時をしのばせる。

1469年、農民が「燃える石」を発見したのが始まりとされる。三池、柳河両藩が採炭を始め、1873年に明治政府が官営化。89年、三井組に払い下げられ、米マサチューセッツ工科大で鉱山技術を学んだ団琢磨（1858～1932年）のリーダーシップの下、飛躍的な発展を遂げた。

多くの坑道は有明海の海底に位置し、総延長は200キロ超。ピーク時には2万人を超える労働者を抱え、100年以上にわたって計約3億トンを出炭した。

囚人労働や朝鮮人、中国人の強制連行の舞台となり、「総資本対総労働の闘い」といわれた三池争議（1959～60年）、死傷者1297人を出した三川鉱の炭じん爆発事故（63年）も起きた。その価値を評価されながら、崩壊や解体に追い込まれた遺構も多い。

「大牟田・荒尾 炭鉱のまちファンクラブ」は、修学旅行で訪れる生徒の案内などを続けている。前理事長の永吉守さん（35）は「日本の近代化を支えた炭鉱の意義を多くの人に再認識してもらいたい」と力を込める。

JR大牟田、荒尾両駅から車で約10分圏内に宮浦石炭記念公園、大牟田市石炭産業科学館などがある。荒尾市の万田坑跡や大牟田市の宮原坑跡の見学は、それぞれ万田炭鉱館（0968・64・1300）、大牟田市生涯学習課（0944・41・2864）に事前の問い合わせが必要。



大牟田市庁舎本館

